

■ ラストサムライに想う



村 田 正 信\*

トム・クルーズ主演の「ラストサムライ」に出演した渡辺 謙が、ゴールデングラブ賞とアカデミー賞の助演男優賞にノミネートされたものの、惜しくも両賞とも受賞がかなわなかった。長期間剣術を学んだトム・クルーズもさることながら、渡辺 謙、真田広之の物に動じない武士としての熱演が強く印象に残っている。と同時に、この映画が外国人によって制作されたことにある感慨を覚えずにはいれなかった。何故今の時代「武士道」なのか？何故、「武士道」とは無縁の外国人の手によって「ラストサムライ」が制作されたのか？

この辺の解説は評論家に任せるとして、「武士道」からすぐに連想されるのは、「忠臣蔵」であり、「切腹」である。主君への忠義の為に死をも辞せずという認識が一般的であるようだが、このような概念が今どき、外国人の興味を引くとは思えない。「切腹」といえば、トム・クルーズ演ずる南北戦争の英雄ネイサン・オールグレン大尉が最初に切腹の場に遭遇し、介錯とあわせて非常に残酷な処刑と誤解したのだが、最後には渡辺 謙演ずる反政府集団の頭領、勝元盛次の介錯をするまでに認識を変えている。そのトム・クルーズをして「武士道とは人類普遍に持つべき精神」と言わしめている。

トム・クルーズの惚れ込みようとはまったく異なる様相が現在の日本ではないだろうか？ここ数年をとってみても、また、あの無定見のバブルに始まり、その崩壊の過程およびその後の閉塞感の漂う期間を通じて表面化してきた政官民を問わないさまざまな醜聞、不祥事を見聞きするに、どうして日本人はここまで墮落してしまったのかと残念を通り越して、将来の日本の行く末が心配で仕方がない。これらの底流に潜んでいるのは拝金主義に近い荒廃した精神構造であり、事なかれ主義、問題先送り主義等々およそ「武士道」とは相容れない様相であると思っている。

「武士道」では「諫言」が重要な位置付けをもっ

ている。今の世でいえば、社長や上司の理不尽な命令や行動を諫め、その会社自身、ひいては社会に対して責任ある行動をするように思い改めさせようとするものである。この行動は個人にとってはきわめて勇気のいることである。左遷や窓際に追いやられることも覚悟しなくてはできない行動である。しかし、武士道ではわが身の安泰、出世のために信念を曲げてまで、唯々諾々と理不尽な命令に従い続けることを許し難い論外の行動であると主張するのである。もしも主君が悔い改めない場合には、主君を強制的に座敷牢に監禁したり隠居させたりする「押込」という行為まで正当化されていたのである。

このような勇気ある行動を可能ならしめたものがあの有名な「武士道とは死ぬことと見つけたり」であろう。文言から大いなる誤解を受けているようであるが、「葉隠」に述べられているこのような境地がとくに社会で枢要な役割を担っている人々に必要であると思っている。この真意は、やたら死ねばいいといっているのではない。「生への未練を断った心構えを堅持して初めて自由の境地に到達し、何ものをも恐れること無く人生を全うできる」と葉隠は述べている。べつの言葉で表現すれば、「思い邪なし」(論語)の境地に到達して初めて自立心と勇気がわき、その帰結として社会に貢献し、自己の人生を全うできる、ということではないかと思っている。

私は、幕末・明治維新以降、日本が西洋の列強に侵略されることなく、やがてはそれらの国々に伍するまでの地位を築いたこと、また、戦後の荒廃から奇跡的に立ち直った力は、世界に通用した高い文化レベル、基本的に高い日本人の資質に加え、「武士道」により培われた精神構造が大きく貢献したと考えている。今一度、本来の良き日本人の精神に立ち戻らなければならないと思うのは私だけではなからう。

\* Masanobu MURATA : 本州四国連絡橋公団 理事